

外塵もなし、されど極めての女嫌ひ、雞も雌は寄せず、隙さへあれば指樽の枕叩ひて、樂び此内にあり、○下略

〔世間母親容氣四〕母から吞込む酒屋の聲殿

さあ今日は結納と騒めき、上下いためつけし手代が目錄を携へ、釣臺に並べしを見れば、干錫鹽鯛鯉節、五升の卷樽。二つ、其外に巻物は扱置き、帶地さへなく、目出度御納め下さるべしとの口上、

○下略

〔書言字考節用集七財〕ナズル手樽

〔大江俊矩記〕文化十三年三月廿六日丙午、俊迪今夕内々歸京也、爲坂迎帶刀道次清八等、自己刻頃、奴茶屋迄遣、○中略酒貳升入手樽壹等爲持遣、

〔置土産〕大釜の拔残し

其言葉も是非に酒を飲ます處と、德利手樽を探せども、いかなく、一滴もなかりし、

〔諸國はなし三〕残るものどて金の鍋 仙人の段

一里ばかりも過ぎて、松原の蔭にて目和もあがれば、老人ひらりと下りて、草臥の程も思ひやられたり、せめては酒一ツ盛るべし、これへ見え渡りて、吸筒も無く、不思議ながら近う寄れば、吹出だす呼吸につれて、美麗き手樽一ツ顯はれける、

〔燭夜文庫附錄〕江月樓探題三十五首狂歌

月 吞つくせいぎ是からは四斗樽のかたぶく迄の月をこそみめ

〔塵塚談上〕文化三寅年の冬、小石川橋戸町駿河屋庄兵衛といふ酒肆あり、毎冬濁酒を造醸しあきなふ、或時酒庫にて四斗樽の空樽へ、濁酒を充滿に入て、酒飲の集る場へ持出し置けるに、暫して酒氣沸激し、蓋を吹飛し、肆中白雨の如くに飛散りて、桶中に酒一滴もなく空樽となりけり、此酒